
深淵の内包者 (闇の断罪者と無の還元者 ~ 世界の秘密と魔法使い ~ の再構成もの)

clown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深淵の内包者 (闇の断罪者と無の還元者) 世界の秘密と魔法使いの再構成もの

【Nコード】

N1769BA

【作者名】

clown

【あらすじ】

元々、この世界には魔力と呼ぶものがあり、その力は世界を循環していた。しかし、人は魔力の存在に気付かずに過ごしていた。ある時、人に魔力をそして、それを操る術・・・魔法を教えた存在がいた。

その存在は『A^{アルヴィス}』と呼ばれ、魔法を世界に広め始めたが、それを阻む者達が現れた。その者達は『(オメガ)』と名のり、『A』

と『』の戦争が始まった。

戦争は激しく、双方に多大なダメージを与え、共に世界から消える形で幕を閉じた。

その後、『A』と『』が残した知識をもとに、人々は魔法を独自に研究し始めた。しかし、未熟ゆえ、すぐにはいかず、同時に『科学』の研究もなされてきた。

そして、数度の世界規模の戦争が起こり、『魔法』と『科学』を発展させてきた。

最後に起こった戦争から200年後、『魔法』と『科学』が交わった世界で、一人の少年の物語は始まる……

闇の断罪者と無の還元者とは登場人物や設定に多少の違いがあります

プロローグ

元々、世界には『魔力』があり、『魔力』は世界を循環している。『魔力』は一つのエネルギーであり、世界を構成する要素でもある。『魔力』は一部の例外を除けば、大きさは様々であるが、世界の全てのものが持つている。

しかし、人はそのエネルギーに気付かずに日常を過ごしていた。

そこに、ある存在が現れた。そのものは突然現れ、『魔力』の存在とそれを運用する方法、『魔法』を世界へと伝え始めた。

その力はとても便利で、火をとすのに木屑や油、摩擦熱等を必要としない。水を得るにも、川から水路を引かなくて良い。風を得るにも態々自然に吹くのを待たなくて良い。畑を耕すのも鋤を持ち、多くの労力を必要としなかった。

『魔法』はとても便利な力であり、少しずつだが、確実に広まっ
ていき、その存在を伝えたものは『魔法』を伝えた最初の存在とし
て、『A』と呼ばれた。その古代魔法文明の時代を『Aの時代』と
呼んだ。

しかし、人がそれを完全に習得するまでには至らなかった。それを
邪魔した者達がいたからだ。

『A』を終わらせるものとして、そのものは『オメガ』と呼ばれた。
『アルヴィス』達もまた、『魔法』を使い、『A』とその弟子達、そして『
』を名乗る者達との間で戦争が始まった。その戦いは激しく、双

方に多大なダメージを与え、共に世界から姿を消す事となった。

しかし、そのもの達が残した『魔法』の知識は世界に残った。人々はその残された知識を用い、『魔法』を発展させていった。しかし、人の『魔法』は発展途上のため、同じくして『科学』も発展していった。が、同時に問題が次々と起こって行つた。『魔法』による犯罪、知識の独占、『科学兵器』の開発・乱用等だ。

そして、再び『魔法使い』による戦争が起こり始めた。この時代の戦争は、『Aの時代』の戦争と異なり、『科学兵器』も用いられ、過去の戦争より、世界に残した傷痕は悲惨なものとなった。

しかし、ただでは転ばないのが人というもの。戦争を通じ、『魔法』と『科学』がさらに発展した。そして、その終戦と同時に、『科学』の一般社会への応用や『魔法』と『魔法使い』の知識や『術式』の公開等を行う様になった。これまでは、『科学』は兵器開発が主であり、『魔法』についても、知識や技術を国や特定の組織が独占していたからだ。それに伴い、法律も改定や新たに制定されていた。

『科学』についてはその全てを国が法を定め、管理をした。『科学』は誰でも扱う事ができるが、威力そのものにはこれといった差はなかったので、基準も明確であり、国で管理できた。

しかし、『魔法』は、発展した結果、場合によっては『魔法使い』一人で一国家を相手取る事が可能なものが現れたり、『魔法使い』同士で組織を設立し世界に混乱を起こすものも現れた。国でその全てを管理するには人材が少なすぎたのである。

そのため、近代の戦争で、戦争終結に協力的だった六つの『魔法

使い』の組織、それを構成する財閥や古くからの家系等に協力を仰ぐ事になった。その組織とは、日本の『魔法協会』、北欧の『聖王騎士団』、中国の『五行の守護者』、アフリカの『九つの柱』、ロシアの『世界樹の根』、アメリカの『神の使途』の六つの組織だ。これらの組織は『六魔天』と呼ばれている。

各国々で『六魔天』との関係性は異なるが、基本的には国の魔法組織、日本では『魔法庁』が『六魔天』へその管理を委託する形となっている。

多くの戦争から、人々は学び成長し繰り返し、『魔法』と『科学』を発展させてきた。そして、世界規模の戦争から約二〇〇年後・・・人々が魔法を生活の一部として当たり前前に捉え、科学と魔法が融合した世界・・・それが、私達の世界だ。

しかし、この世界には幾つもの不思議が溢れている。その最たるものは『A』と『』だろう。このもの達はどこから来たのか・・・そして、何処へ消えたのか・・・かつての戦争で滅んだのか・・・それとも・・・

世界にはまだ、私達の知らない事が満ちている・・・

そこは、夕方の公園、幼い少女が砂場で屈み、泣いていた。

「なあ？何で泣いているんだ？」

その場を通りかかった同い年位の少年は気になり声をかける。少年は、家に帰っても誰もいないため、何時も日が暮れるまで外で時間を潰していたが、その少女を見るのは初めてだったので気になっ

ただ。

「グスツ・・・ふえ・・・？」

少年が何度か声をかけると、少女はようやく自分に声をかけられている事に気付いたのか、反応を見せる。しかし、未だ俯いているため、その顔までは見えない。

「よ！どうしたんだ？なんで泣いているんだ？」

「・・・グスツ・・・一人・・・だから・・・」

「え？」

「誰も、私を見てくれないから・・・」

少女の答えを、少年は勝手に解釈した。誰も自分を見てくれない、一人ぼっち・・・つまり、親に構って貰えず、友達もいない・・・と。

「・・・そつか・・・じゃあ、俺と一緒にだな。」

「・・・一緒？」

少年の母親は既に他界し、父親は全く家に帰ってこない。お金は届くがそれだけだ。学校へ行っても友達はいない。理由は・・・分かっていない。クラスメイトのリーダー格の人物と、その取り巻きとケンをし、そいつらを半殺しにしたからだ。

しかし、少年はやり過ぎたとは思っているが、悪いとは思っていない。

ない。そもそも、原因は相手が、イジメをしていたからである。それを止めただけの事だ。なのに、周囲は先生も含め少年を悪だという。謝れという。しかし、少年は謝らない。その結果、学校でも一人となったのだった。助けたはずの少女も怯え避けられていた。

「ああ、俺も一人なんだ。なあ、俺と友達にならないか？」

「私と・・・？いいの？」

「ああ！一緒に遊ぼう！俺は　くろさわ　けい！君は？」

「私は・・・くろひめ・・・」

そう言い、初めて、少女は顔を上げた。その顔は・・・

「ふぎゃー！ー！ー！！！」

オッサンだった・・・

「はっ！・・・はあ、はあ、はあ・・・」

少年は布団を跳ね飛ばし起き上がる。悪い夢を見ていたのだろうか・・・動悸が激しく、息切れを起こしている。

相当の悪夢を見たのだろう。思わず自分の居場所を確認している。8畳位の部屋に、本棚、テレビにテーブル、机・・・何時もの自分の部屋である事に安堵の息を吐く。

「・・・夢？・・・はあ、はあ・・・最低な夢だった・・・クソ！俺の思い出を・・・」

少年・・・歳は一五歳位だろうか・・・短めの黒髪に、黒い瞳、整ってはいるが、現在は、夢見の悪さからか、もの凄く不機嫌な表情だ。

「おっさんめ・・・良くも俺の大切な思い出を・・・っと・・・今何時だ？」

自分の発した言葉で、『おっさん』に呼ばれていた事を思い出した少年は枕元に置いてある時計を確認する。すると、顔色が変わる。

「やべ！時間が！おっさんとの約束が！」

少年は急ぎ身支度を整え部屋を出て行く。遅れると説教が長くなる。

そこは、世界のどこかにある城。その廊下を少年が急ぎ歩いている。黒いスーツに身を包んでるが、急いで着替えたためか着崩している。

少年は一つの扉の前で立ち止まった。そして、時計を確認し、間に会った事に安堵し、呼吸を整えノックする。

そして、ノックをすると返事を待たず入っていった。

「慧けい、ノックをしたら返事を待つのが本当だろ？直ぐに入ってくる

奴があるか・・・」

中には一人の男がいた。少年・・・慧と同じ黒い髪に黒い瞳、同じスーツに身を包んだ男性だ。年は40代前半といったところか・

慧の行動を呆れた声で嗜める。しかし、男性の顔を見た慧は、今朝がた見た夢を思い出し、怒りをぶつける。

「五月蠅い！俺の思い出を穢しやがって！反省するのはおっさんの方だ！間に合ったからいいだろ！」

逆ギレして怒鳴る慧だが、『おっさん』は何故ここまで怒っているのか分からない。怒られる理由も思い当たらないため、慧を嗜める。

「訳の分からない事で怒鳴るな。全く・・・とりあえず、ノックしたら返事を待て？いいな？」

「む・・・うん。ごめんなさい。俺が悪かったです。」

『おっさん』に冷静に窘められ、慧も冷静になり、謝る。慧が素直に謝ったので『おっさん』は「分かれば良い」と手で、合図する。

「それで、おっさん。話って？」

気を取り直し、今朝見た夢は忘却の彼方へと吹き飛ばし、書類仕事をしている『おっさん』・・・晟せいに慧は問う。そもそも、晟から話があると呼び出したのだ。

「ああ、慧。お前、今度『一天城ヶ丘学園』へあまぎがおかがくえんの高等部に入学するんだろ？」

「ああ、それが？」

「そこ、未来が運営している学園だぞ？」

「・・・はあ！？え？未来って、未来さん？『魔法協会』の『七大法典』の一人の『真の未来』？」

「ああ、そつだ。」

慧が驚くのも無理はない。『魔法協会』とは慧が所属している組織『断罪の牙』と敵対している組織の一つだからだ。そこに通うと言ふ事は敵陣に乗り込むと言ふ事と同義だ。

なお、『七大法典』とは『魔法協会』のトップの七人の事を指す。その内の一人が『真の未来』と言ふ訳だ。

「はあ、お前な・・・自分が試験を受けた学園の事位、ちゃんと調べておいたらどうだ？」

「んなこと言つたつて、友達ダチがここに一緒に受けなかつて誘つてきたから受けただけだし・・・もしかして、結構有名なのか？」

数少ない友人と一緒に受けないかと言われ二つ返事で返したため、どのような学校か調べなかつたのが裏目にでたのであった。

「そりゃな。『真の未来』が理事長を務める学園・・・というか『六魔天』の内『魔法協会』が運営する学園つてことで、結構有名だ

ぞ？日本にある魔法学校の内、七つしかない『魔法協会』運営の学校だからな。倍率だって高いはずだが？」

慧はその話を聞き、驚く。何に驚いたのかと言うと、慧は魔法学以外は平均位のため、良く受かれたなと思っっているのだ。

「そうだったのか・・・で、どうすりゃ良いんだ？」

このまま入学すれば、組織間の抗争・・・いや、戦争になる恐れもある。敵対している組織の人間が断りもなく敵陣地に侵入するのだ。当たり前だろう。

「ああ、未来には俺から連絡を入れておいた。入学してから、一度未来に挨拶に行け。それで大丈夫だ。」

しかし、断りを入れれば話は別だ。といっても他の者・・・『世界樹の根』や『五行の守護者』等他の『六魔天』や『魔法協会』内でも、『断罪の神威』など他の『七大法典』が理事を務める学園であつたら、こうはいかない。『真の未来』だからこそ、話を通じるのだ。

何故なら、『魔法協会』・・・というより『六魔天』と『断罪の牙』は敵対していわけだが、組織と、個人では話は別なのだ。

特に、『真の未来』は話を通じる上に、慧達の様な者相手でも、ちゃんと対等に扱おうとしてくれるので、個人としては慧も晟も嫌いではない。むしろ、好ましく思っている。それは未来も同じ様に思っっているだろう。だからこそ、慧なら問題ないと判断し、許可を出したのだろう。

「まあ、変りに何か仕事を頼まれるかも知れないが、出来る限り聞

「いてやってくれ。」

「・・・面倒だが、許可を貰った以上は仕方ないな。了解。話は以上か？」

「ああ、それと、ほら！」

そついい、晟は慧に何かを投げる。

「これは？」

それは、小さな箱で丁寧に包装されている。

「入学祝いだよ。入学おめでとつ。慧。」

「あ、ありがとう。おっさん。」

慧は感謝し、視線で開けても良いか確認し、晟が頷いたので、包装を開ける。

「おっさん！これって・・・」

「ああ、以前のものは壊れただろう？お前の場合、表と裏、二つの生活があるからな。それが無いと不便だからな。知り合いの細工師に加工してもらったものだ。これまでのものより、良い出来だぞ。」

箱の中身には黒い宝石をはめ込んだブレスレットが入っていた。

一目見ただけでは気付かないかも知れないが、結構な魔具である。

魔具とは術式を刻んだものや魔力が封じて有るもの、固有の特殊

な効果を持ったものなど様々だが、ようは『魔法』を補助するための道具だ。

「有難うな。大事に使わせてもらうよ。じゃあな!」

「ああ、無茶し過ぎて壊すなよ?」

慧は晟からもらったブレスレットを抱え、部屋からでていった。後に残ったのは晟一人・・・

「ふふふ、苦勞しますね、晟。」

ではなかった。どこからか、男性の声が聞こえてきたのだ。

「盗み聞きとは感心しないな・・・炎耶^{えんや}」

「すみません。そのようなつもりはなかったのですが・・・」

その言葉と同時に、白い炎が浮かび上がると、その炎が人の形を模ってゆく。するとそこには、白い髪に赤い瞳、着ているスーツは晟や慧と同じもの・・・白河^{しろかわ} 炎耶^{えんや}が現れた。

「はあ・・・まあいい。それと、俺は別に苦勞とは思ってないぞ?むしろ大変なのは慧だ。自ら望んでとはいえ、表と裏を行き来しているんだからな。」

「そのために渡した『魔具』ですからね。一年前に壊れて以来、使用魔法に制限がかかっていましたから。まあ、その効果は裏にいる際には関係ないものですけどね。」

その白河の言葉から、慧には本来必要がないものの様だ。しかし、表の生活を続ける以上は必要なものであるらしい。まだ、他にも何かある様ではあるが・・・

「そうだな・・・だが、あれから・・・慧が本気になる事は一度もなくなったけどな。だからこそ、1年も待たせても問題なかったわけだが・・・学園生活で、なにかしら心境に変化があつて欲しいものだが・・・」

「仕方ありません。あんな事があつたんですから・・・私達は見守ることにしましょう。」

「ああ・・・で？俺に用事があつたんだろ？どうしたんだ？」

慧の事で少ししんみりした空気を変える様に、晟は白河に話を振る。元々何かの用事でここにきて、その際に話を聞いていたのだから事は察することができた。

「ええ、未確認ではあるのですが、『鋼王』を目撃したという情報が入りまして・・・」

白河の言葉に、晟は目を丸くする。

「・・・そうか・・・数年間音沙汰がないと思えば・・・炎耶、引き続き調査してくれ。」

「わかりました。では・・・」

「・・・フリード・・・今になって何故出てきた・・・」

その眩きは闇に呑まれ消えていった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1769ba/>

深淵の内包者（闇の断罪者と無の還元者～世界の秘密と魔法使い～の再構

2012年1月4日14時47分発行